2014年度第2回教養文化研究所主催公開講演会報告

教養文化研究所所長　廣野　行雄

実施日時：７月７日（月）13:30〜15:00
講　　師：彭　広陸（ほう　こうりく）氏
題　　目：私の体験的中日比較関係論
場　　所：駿河台大学7405教室（第２講義棟４階）

廣野　本日は，雨の中たくさんお集まりいただきましてありがとうございます。私，教養文化研究所の所長をしております廣野と申します。

講演に先立ちまして，一言ごあいさつ申し上げます。

本日の講師でいらっしゃいます彭広陸先生の詳しいご経歴については，本日の講演の中の内容に重なっておりますので，この後のお話しの中でご本人からご紹介があるのではないかと思います。従いまして，ここでは1957年北京のお生まれで，北京大学の外国語学院，日本語・日本文学学部の教授でいらっしゃるというにとどめさせていただきたいと思います。

私が初めて先生にお目にかかりましたのは，今から12年前の2002年のことで，翌年から１年間の在外研究をするに当たって，北京大学での受け入れをお願いしたときでした。共通の友人である法政大学の玄宜青さんに引き合わせていただいたのが最初の出会いであったと思います。2003年といいますと，中国で新型肺炎，いわゆるSARSが猖獗（しょうけつ）を極めた年でした。顧みますと，そのような特殊な年であったことが思いがけず私の在外研究を，忘れがたく，また多いに意義あるものにしてくれたわけですけれども，本日は私の講演ではございませんので，そのことについてはそれ以上は申し上げません。要するに，そのような深刻な状況下で中国語の下手な中年の日本人という，非常に手間の掛かる人間を本当に親身になって世話してくださる，そのようなお人柄の方であるということを申し上げたく思います。

ところで，この講演会の開催日を本日7月7日に選んだのは，それなりの理由がございます。今から77年前の1937年7月7日に北京郊外の盧溝橋で起こった軍事衝突が日中戦争の始まりでした。それ以前の6年間も実質的に戦争状態でしたけれども，全面的な戦争に突入したのがこの日だったというわけです。今日，尖閣列島の領有権，

あるいは首相の靖国参拝をめぐって，日中関係は戦後最悪の状態になっています。新聞の世論調査によりますと，双方の国民の10人に8人が，お互いの国のことが嫌いだと言っています。

ところが，私がこの大学に勤めるようになってからつい数年前まで大体毎年，第二外国語の中で一番履修希望者が多いのは中国語でした。他の大学の状況を聞いてもおおむねそのようです。つまり，多くの日本人が中国に対して好意を持っているとは言わないまでも，少なくとも嫌悪感は抱いていなかったわけです。日中戦争が始まる直前にも日支友好とか善隣友好が叫ばれていました。

おおよそ，人々の気分ほど当てにならないものはありません。マスコミ報道，識者，政治家という他人の言葉によって醸成された気分は，風向き次第でいとも簡単に逆向きになります。私たちはできるだけ多くのことを自分の目で見，自分の耳で聞き，自分の頭で考えることが大切なのではないでしょうか。そういう意味で，本日も彭先生の講演が皆さんの自前の思考，自立の思考にとって良き参考になれば，望外の幸せです。

最後に，正確には旧暦でなければならないのですが，7月7日は七夕です。日本と中国の市民たちが，猜疑心や子どもじみた敵意の淵瀬を乗り越えて，再び相会うことを願ってやみません。

それでは彭先生，よろしくお願いいたします。